

# 育児期家族の生活と心理

佐藤 淑子（児童学科・教授）

## Families of Preschoolers: Their Life and Psychology

Yoshiko Sato

### Abstract

The purpose of this study is to examine work-life balance and co-parenting in families of preschoolers. The Participants were 366 couples. The results indicated that the father's long working hours reduce the frequency to take care of their children. Stress in working mothers was higher than that in fathers, and yet, the negative spill over from work to home was higher among fathers than working mothers. This may be due to micro gender-politics within family.

**Key words :** co-parenting, work-life balance, gender role, gender politics, comparative study, questionnaire survey

**キーワード：**育児の協同、ワーク・ライフ・バランス、性別役割、夫婦間コミュニケーション、ジェンダー・ポリティックス、比較研究、質問紙調査

### 問題

これまで日本国内の育児期家庭の生活の実態を捉え、居住地域による育児の多様性及び、母親の就業形態や学歴などの社会・人口動態的な変数と父母の育児行動、育児感情とのかかわりを報告した（佐藤，2011；2012）。

ところで、国際比較研究は日本の父親の育児参加が著しく少ないことを指摘している（深谷，2008；牧野，2010）。その理由として日本の男性の労働時間が長いこと及び、性別役割分業意識が根強いことが挙げられてきた。

労働時間の長さは父親の育児参加に影響を与え、と考えられるが、労働時間が長いのに育児参加が高い父親、反対に、労働時間が短いのに育児参加が低い父親の研究報告があることから、父親が積極的に子どもに関わることは媒介要因がある可能性が考えられる（柏木，1993）。乳幼児を持つ父親の育児参加は仕事中心の仕事観、子どもに対する関心の低さ、子どもの価値の低さなど子ども観が関連することが明らかにされている（福丸ほか，1999）。

性別役割分業意識が夫婦の育児の協同に与える

影響について、船橋（2006）は育児にひそむジェンダー・ポリティックスについて論じている。すなわち、現代家族には産育を通じて男女の不平等を再生産していくようなからくりが存在し、家族はジェンダー秩序（男女の生物学的差異を理由に、絶えず男性を主体に女性をその補助的存在へと位置付けることによって、社会的な性別格差を生み出ししていく社会秩序）の磁場と男女の平等主義のベクトルのせめぎあい場ではないかと考察した。そして、家事・育児分担をめぐるカップル間の交渉を分析する際に、夫婦間の潜在的な葛藤や、葛藤すら生じさせない日常的自明性の政治性に注目し、これらをミクロなジェンダー・ポリティックスと定義している。

船橋の研究は3カ国のカップルを対象とするインタビューに基づいた質的データにもとづいて、稼ぎ手役割、ケア役割の配分による育児のシェアの類型論を導いている。

本研究では夫婦の育児の協同について、①育児行動、②育児感情、③育児時間、④家事分担、⑤性別役割分業についての考え方、⑥親自身の自尊心、⑦夫婦間コミュニケーション、⑧子どもへの発達期待と性別しつけ、⑨心理的ストレスの項目を用いて尋ねた（佐藤，2011；2012）。これに加え、親自身の年齢、学歴、職業の有無と形態、家族構成を問うた。

調査の手続きについては、佐藤（2011）で報告したように、2009年から2010年にかけて保育所6園と幼稚園2園において、乳幼児を持つ父母を対象に質問紙調査を実施した。質問紙調査の実施に当たっては、調査に協力していただいた保育所と幼稚園の園長先生に研究の目的と概要を説明した。調査用紙には、調査目的を記し、無記名回答であること、夫婦のマッチングのためのナンバリングをしていること、調査結果を希望する父母には回答を送付することを明記した。回収にあたっては、夫婦のプライバシーを守るため、別々の封筒で封をしたうえで返却してもらった。質問紙の配布数は962組、回収率は47%である。ペアデータ366組（有効回収率38%）についてデータ分析を行った。

本稿では、この量的データに基づき、夫婦の育児の協同について、多面的に考察することが可能である。今回は、この質問紙調査のデータを、社会・人口動態的な変数が父親と母親の自己認識や夫婦間コミュニケーション、心理的ストレスにどのような影響を与え、それが父母の育児行動・育児感情にどうかかわっているのかに焦点を当て、検討する。そして、そこから日本の夫婦の育児の協同を阻む要因が父親の長い労働時間であるのかを検討し、夫婦の間のミクロのジェンダー・ポリティックスの実態を考察する。

## 結果と考察

### （1）父親の仕事時間と育児行動・育児感情

上述の調査研究（佐藤，2011）において、夫婦の「育児行動」尺度の構造を明らかにするため、全20項目について全調査協力者のデータによる因子分析を行い「生活習慣のしつけ」、「身体的な世話」、「遊び」の3因子が得られている。また、「育児感情」全14項目については「子ども・子育てへの肯定感」、「子育てへの否定感」、「子どもからの独立性」の3因子が得られている。

父親の1日の仕事時間<sup>注1</sup>が比較的短い10時間以下の111名と14時間以上19時間以下の長時間群88名の2群に分け、上述の「育児行動」3因子および「育児感情」3因子とのかかわりをみた。家庭教育に関する国際比較調査報告書（国立女性教育会館，平成16・17年度）によれば、父親の1週間の仕事時間が35時間以上49時間未満で44.1%であり、60時間以上は22.7%である。本調査の父親のほうがより長時間労働に従事しているといえる。

**Table 1** 父親の仕事時間の長短群別の育児行動

父親の仕事時間 育児行動	父親		t値	sig.
	短群 (n=111)	長群 (n=88)		
生活習慣のしつけ	2.75 (.75)	2.73 (.62)	0.13	n.s.
身体的な世話	2.45 (.83)	2.17 (.70)	2.65	**
遊び	2.83 (.71)	2.73 (.64)	0.97	n.s.

注. 数値：平均値(SD), \*\* $p < .01$

**Table 2** 父親の仕事時間の長短群別の育児感情

育児感情	父親		<i>t</i> 値	sig.
	短群 ( <i>n</i> = 111)	長群 ( <i>n</i> = 88)		
子ども・子育てへの肯定感	4.22 (.61)	4.35 (.56)	-1.56	<i>n.s.</i>
子育てへの否定感	2.30 (.68)	2.22 (.72)	0.76	<i>n.s.</i>
子どもからの独立性	3.90 (.66)	3.85 (.73)	0.52	<i>n.s.</i>

注. 数値: 平均値(*SD*)

なお、仕事時間と学歴の間に相関はみられなかった ( $r(357) = .016, n.s.$ )。

まず、育児行動についてみると、「生活習慣のしつけ」と「遊び」については2群間で差はみられなかった。「身体的な世話」についてののみ、仕

事時間の短い群のほうが、仕事時間が長い群と比較してよく行っている (Table 1)。

次に、育児感情についてみると、父親の仕事時間の長さによって、父親の育児感情はどの面についても違いはみられない (Table 2)。

フルタイムで働く母親とその配偶者である父親の家庭外労働と家庭内労働 (家事・育児) に従事する時間を比較した (Table 3)。母親は育児と家事時間を合わせると、7時間以上を家庭内労働に割いており、夫婦の育児の協同からは程遠い働き方を余儀なくされている。父親の意識と行動は、母親、とりわけ、フルタイム職の母親に、稼ぎ手としての役割とケア役割の二つを等しく担う状況に追い込み、大きな負担をかけている。

**Table 3** フルタイムの母親とその夫の育児・家事・仕事時間 (対応のある *t* 検定)

	人数	フルタイム母親	妻がフルタイムの父親	<i>t</i> 値	sig.
育児時間	121	4.36 (1.32)	> 2.38 (1.42)	20.67	***
家事時間	109	2.83 (1.42)	> 0.83 (0.69)	19.55	***
仕事時間	113	8.95 (1.54)	< 12.11 (2.56)	-19.65	***

注. 数値: 平均値(*SD*), \*\*\* $p < .001$ 

## (2) 夫婦間コミュニケーションと夫婦の育児行動・育児感情

乳幼児を育てる夫婦を対象とする実証的研究から、夫婦間コミュニケーションがスムーズであれば、夫婦間の親密な信頼関係の形成・維持に寄与し、母親が夫からのサポートを受けていると感じることにつながり、育児不安を低減するという間接的効果が指摘されている (石・桂田, 2006)。また、多重役割に従事する子育て期夫婦を対象とした研究からは、夫の家庭関与度が妻と夫の夫婦関係満足度を規定することが報告されている (伊藤ほか, 2006)。これらの研究から、夫婦関係の満足度と夫婦の育児行動が相互に規定されていることが示唆されている。そこで、本研究では夫婦間コミュニケーションや夫婦関係満足度を問い、夫婦の育児の協同とのかかわりをみた。

夫婦間コミュニケーションについては、母親と父親を対象として、①平日の平均的な会話時間、

②その会話時間についての満足度、③夫婦関係についてうまくいっていると思うかを尋ねた。これ以外にも母親に対して、④子どもをあずけて夫婦だけで遊びに出かける行動、⑤子どもをあずけて夫婦だけで旅行に出かける行動、⑥お祝の日のプレゼントや特別な食事をするかを尋ねた。

まず、夫婦の会話時間を妻と夫の回答別に示し

**Table 4** 夫婦の会話時間

会話時間	妻		夫	
	人数	%	人数	%
ほとんど話さない	7	1.9	7	1.9
10分未満	33	9.0	30	8.2
10～30分未満	108	29.5	106	29.0
30～60分未満	115	31.4	108	29.5
60～90分未満	56	15.3	65	17.8
90～120分未満	24	6.6	21	5.7
120分以上	21	5.7	26	7.1
無回答	2	0.5	3	0.8
合計	366	100.0	366	100.0

た。これによると、夫婦間の1日の会話時間は60分未満が夫、妻のいずれの回答でも7割近い(Table 4)。

次に、会話時間に関する満足度は、充分と考えているものよりも短いとみているものが、妻、夫いずれでも多く、妻では52.2%、夫では54.1%が「短いと思う」と答えている。夫婦がお互いにもっと長く会話できればよいと考えていることがわかる(Table 5)。

Table 5 会話時間の満足度

会話時間の満足度	妻		夫	
	人数	%	人数	%
充分だと思う	169	46.2	163	44.5
短いと思う	191	52.2	198	54.1
長いと思う	3	0.8	0	0.0
無回答	3	0.8	5	1.4
合計	366	100.0	366	100.0

上述の6項目のうち、④子どもをあずけて夫婦だけで遊びに出かける行動、⑤子どもをあずけて夫婦だけで旅行に出かける行動、⑥お祝の日のプレゼントや特別な食事をすると答えたケースが少なかったため、「夫婦関係得点」は、会話時間「30分以上」を1点、会話時間「充分だと思う」を1点（「短いと思う」、「長いと思う」は0点とした）、夫婦関係が「とてもうまくいっている」ま

たは「どちらかというとうまくいっている」と回答した場合を1点として、合計3点満点とした。

夫婦関係得点が0点から1点を低群、2点から3点を高群として、夫婦関係得点の高・低による育児行動の3因子の $t$ 検定を行った(Table 6)。その結果、父親においては、「生活習慣のしつけ」と「身体的な世話」において有意差がみられ、夫婦関係得点の高群が低群よりも有意に高い。「遊び」についても高群のほうが低群より高い傾向がみられた。父親は夫婦関係がよいときに育児により参与する傾向があるといえるだろう。他方、母親においては、どの面でも夫婦関係得点の高低による育児行動の有意な差がみられない。父親においては、母親との関係によって育児行動に違いが見られるということは、父親に、「育児は母親が主に担うもの」という認識があり、夫婦関係がよいと、妻をより多くサポートするため、子育てへの参与が多くなるのではないか。

また、夫婦関係得点の高低と育児感情について検討した(Table 7)。母親においては夫婦関係得点高群のほうが夫婦関係得点低群より「子育ての否定感」が有意に低かった。父親においても、夫婦関係得点高群のほうが夫婦関係得点低群より「子育てへの否定感」が低い傾向がみられた。上述の育児行動の分析結果と考え合わせると、母親

Table 6 夫婦関係得点の高・低による育児行動の比較

	父親				母親			
	夫婦関係 低群( $n=109$ ) 平均値 ( $SD$ )	高群( $n=249$ ) 平均値 ( $SD$ )	$t$ 値	sig.	低群( $n=111$ ) 平均値 ( $SD$ )	高群( $n=255$ ) 平均値 ( $SD$ )	$t$ 値	sig.
育児行動								
生活習慣のしつけ	2.58 (.66)	2.79 (.69)	-2.61	**	3.64 (.39)	3.69 (.38)	-1.21	n.s.
身体的な世話	2.25 (.75)	2.44 (.80)	-2.10	*	3.84 (.43)	3.91 (.23)	-1.47	n.s.
遊び	2.73 (.67)	2.88 (.69)	-1.92	†	3.20 (.63)	3.31 (.54)	-1.57	n.s.

注. † $p < .1$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 7 夫婦関係得点の高・低による育児行動の比較

	父親				母親			
	夫婦関係 低群( $n=109$ ) 平均値 ( $SD$ )	高群( $n=249$ ) 平均値 ( $SD$ )	$t$ 値	sig.	低群( $n=111$ ) 平均値 ( $SD$ )	高群( $n=255$ ) 平均値 ( $SD$ )	$t$ 値	sig.
子ども・子育てへの肯定感	4.29 (.57)	4.22 (.62)	0.91	n.s.	4.29 (.51)	4.37 (.51)	-1.26	n.s.
子育てへの否定感	2.38 (.66)	2.24 (.67)	1.78	†	3.03 (.76)	2.79 (.77)	2.76	**
子どもからの独立性	3.77 (.71)	3.84 (.68)	-0.81	n.s.	4.06 (.57)	4.04 (.61)	0.30	n.s.

注. † $p < .1$ , \*\* $p < .01$

においては、夫との関係によって子どもへのケアに違いはみられないが、育児に携わる気持ちの上では異なるということである。

以上のことから、先行研究と同様に、夫婦関係が良好であることと育児との間には連関がみられた。母親は夫婦関係により育児行動への影響を受けることはみられないが、父親については「生活習慣のしつけ」と「遊び」においてより多く子どもと関わる傾向がみられた。他方、母親については良好な夫婦関係が育児感情の「子ども・子育てへの否定感」の低減とかかわることが示唆された。

### (3) 父親と母親の自尊心の発達

母親の自己意識と育児不安の関連についてはすでにいくつかの報告がなされている。保育園児を持つ母親のディストレスを検討した研究では、自分の意見をはっきり言え、他人の言動に動かされずに自分を信じる傾向が高い場合に育児不安が低いことが確認されている（石・桂田, 2010）。他方、産後の母親を対象とする研究では、自分に対する自信を持つ母親ほど理想の母親役割が高く、むしろ育児不安が高いという報告がある（渡辺・篠原, 2010）。

一般に、自尊心が高いことは問題解決能力が高いとされるので、育児不安は低いと予想されるが、父親と母親、そして、母親の就業形態によって、父母の自尊心に違いがみられるかどうかをここでみる。そして自尊心と育児感情のかかわりを検討する。

父親と母親の自尊心はローゼンバーグの自尊心尺度10項目（遠藤ほか, 1992）によって測定した。

まず、母親の場合をみよう。フルタイムで働く母親、パートタイムで働く母親、専業主婦の母親を自尊心得点によって比較した（Table 8）。フルタイム群とパートタイム群の間に自尊心の発達の有意差はみられない。そして、家事・育児に専念する専業主婦群が仕事と家事・育児を同時に担うパートタイム群より自尊心が高い傾向がみられる。先行研究においても、日本では仕事を持つ女性と専業主婦の女性の間には自尊心の発達の違いがみられていない（渡邊, 1998）。仕事を持つ女性は男性並みには仕事をできないし、専業主婦並みには家事・育児をできずどちらも十分遂行できないという二重基準に心理的に拘束されているからではないかとされる。

なお、過去1年間の収入の夫と妻の割合について、全体を10とした時の妻の貢献度を母親に尋ねた。家庭の収入全体を10としたときに、フルタイムの妻の収入が占める割合の平均値は3.80（SD 1.24、120人）であり、パートタイムの妻は2.12（SD 1.20、131人）であった。フルタイムで働く母親は家庭の収入の4割近くを担いながら、パートタイムの母親、専業主婦と比べて自尊心が高いわけではない。日本の女性においては、自分の収入を持つことや家計への貢献が自尊心の高さと必ずしも結びつくわけではないといえよう。

一方、父親についてはどうであろうか。専業主婦の妻を持つ父親はフルタイムで働く妻を持つ父親と比較して、5%水準で有意に自尊心が高い。またパートタイムで働く妻を持つ父親と比較して、0.1%水準で有意に自尊心が高い。このことから、男女共同参画が謳われる今日でも、自分の収入だ

Table 8 母親の就業形態3群別の父母の自尊心

		平均値	SD	F値	自尊心 sig.	多重比較	sig.
母親	フルタイム (122人)	2.77	(.51)	3.20	*	パート<専	†
	パートタイム (137人)	2.64	(.50)				
	専業主婦 (92人)	2.79	(.47)				
父親	妻フルタイム (122人)	2.81	(.46)	10.23	***	フル<専	*
	妻パートタイム (137人)	2.68	(.50)			パート<専	***
	妻が専業主婦 (92人)	2.99	(.51)				

注. †  $p < .1$ , \*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$



けで家族の生活を支える稼ぎ手であり、妻からの実質的、感情的ケアを受け取る側に立つ夫（柏木・平山，2001）は自尊心が高いことが推測される。

さらに、パートタイムで働く妻を持つ父親は、フルタイムで働く妻を持つ父親と比較して有意差こそないが3群中、自尊心が最も低いことがうかがえる。

**Table 9** 父母の自尊心の比較：対応のある *t* 検定

	母親		父親	<i>t</i> 値	<i>sig.</i>
自尊心	2.73 (.52)	<	2.82 (.50)	-2.74	**

注. 数値：平均値(*SD*)，\*\**p* < .01

**Table 10** 父母の自尊心と育児感情の相関

	子ども・子育て への肯定感	子育てへの 否定感
母親の自尊心	.329 ***	-.472 ***
父親の自尊心	.344 ***	-.433 ***

注. 数値：相関係数，\*\*\**p* < .001

夫婦の自尊心を比較すると、夫の自尊心の平均値のほうが妻より1%水準で有意に高い（Table 9）。日本では子どものころから女性の自尊心が男性より低いのが特徴的であるが（佐藤，2009）、成長しても同様であることがみえる。そして、母親、父親ともに、自尊心は育児感情の「子ども・子育てへの肯定感」と正の相関があり、逆に、「子育てへの否定感」との間には負の相関がある（Table 10）。

#### (4) 多重役割を担う母親のストレスとネガティブ・スピルオーバー

既婚女性の就業率は上昇しているが、その中でも乳幼児を育てながら働く女性の肉体的、精神的負担はきわめて高いと推測される。先行研究において、多重役割を担う母親は家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバーが父親と比べて有意に高いが、その一方で両役割間のポジティブ・スピルオーバーも父親と比べて有意に高いことが報告されている（福丸，2000）。

本研究では父親と有職の母親<sup>注2</sup>のワーク・ライフ・バランスを検討するため、父親及び仕事を持つ母親を対象に、仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーを「家にいても仕事のことを考える」、「私の妻（夫）は私の気持ちに家庭よりも仕事にあることに不満を持っている」、「子どもの誕生日でも重要なことがあれば仕事を優先する」3項目で問うた。また、ストレスを測定する5項目（頭痛・不眠・一日の終わりの強い疲労感・イライラしたり、怒りっぽくなる・ゆううつさ）について5段階で尋ねた。

まず、父親と有職母親のストレスを比較すると0.1%水準で母親のストレスが高い（Table 11）。

**Table 11** 有職母親（自営業含む）と父親のストレスの比較（対応のある *t* 検定）

	有職母親 ( <i>n</i> = 265)		父親 ( <i>n</i> = 265)	<i>t</i> 値	<i>sig.</i>
ストレス	2.15 (.76)	>	1.89 (.75)	4.29	***

注. 数値：平均値(*SD*)，\*\*\**p* < .001

次に、母親の就業形態によるストレスの比較をする。フルタイムとパートタイムの2群間で有意差はみられない。父親のストレスについては、妻がパートタイムの場合に、フルタイムで働く母親

**Table 12** 母親の就業形態別の父母のストレスの比較

母親	人数	平均値 ( <i>SD</i> )	<i>t</i> 値	<i>sig.</i>		
フルタイム	122	2.06 (.72)	-1.59	<i>n.s.</i>		
パートタイム	133	2.21 (.77)				
父親			<i>t</i> 値	<i>sig.</i>	多重比較	<i>sig.</i>
妻がフルタイム	121	1.78 (.67)	3.05	*	妻がフル < 妻がパート	*
妻がパートタイム	133	2.00 (.79)				
妻が専業主婦	91	1.85 (.64)				

注. \**p* < .05

である場合と比較して 5 %水準で有意に高い (Table 12)。

有職の母親と父親についてそれぞれ、育児感情とストレスの相関をみたものが Table 13 である。母親、父親のいずれにおいても「子育てへの否定感」とストレスの間に正の相関がある。また母親については、「子ども・子育てへの肯定感」とストレスの間に負の相関がある。

**Table 13** 育児感情とストレスの間の相関

	有職母親 ( <i>n</i> =274)	父親 ( <i>n</i> =274)
子ども・子育てへの肯定感	-.194 **	-.064 <i>n.s.</i>
子育てへの否定感	.438 ***	.266 ***
子どもからの独立性	-.046 <i>n.s.</i>	-.060 <i>n.s.</i>

注. 数値：相関係数, \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

さらに、共働きで乳幼児を育てる夫婦の心理的ストレスや、家庭に仕事を持ちこむことが夫婦の間でどのように関連するのかをみる。その際に、フルタイムで母親が働く家庭と、パートタイムで働く家庭を比較する。

まず、Table 14 に示したように、フルタイムで母親が働く家庭では、妻の仕事時間と妻自身のス

トレスの間には 5 %水準で正の相関がみられ、長い仕事時間が心身の負担になっていることが伺える。また、妻の残業時間と夫のストレスには 0.1 %水準で正の相関がみられ、夫にとっても妻の長い仕事時間が心の負担になっている。そして、夫とフルタイム職の妻のストレスには 0.1%水準で正の相関がみられた。

他方、夫とパートタイム職の妻のストレスには相関がみられない (Table 15)。夫の仕事時間と夫自身のストレスの間には有意傾向がみられるが、妻の仕事時間と、妻自身のストレスには相関がみられない。

職業生活が夫婦関係と心理的健康に及ぼすクロスオーバーについて検討した先行研究 (伊藤ほか, 2006a; 伊藤ほか, 2006b) では、夫婦の一方に生じた事象が他方に影響を及ぼすクロスオーバーは、妻の就業形態によって異なることを報告している。妻の就業形態別にみると、妻フルタイムの夫婦は「個別化型 (自立型)」で、妻パートの夫婦は妻の仕事へのコミットメントが夫の心理的健康に影響を及ぼす「共振型」の夫婦関係であると結論付けている。伊藤ほか (2006a) の研究は小学生の子どもを持つ夫婦を研究対象とし、伊藤ほか (2006b) の研究は短大生、大学生の成長した子どもを持つ中年期の夫婦を対象としている。乳幼

**Table 14** 仕事時間、残業時間とストレスの相関係数：妻フルタイム122人とその夫

	夫の ストレス	妻の1日の 仕事時間	夫の1日の 仕事時間	妻の 残業時間	夫の 残業時間
妻(フルタイム)の ストレス	.349 ***	.230 *	.085	.079	.138
夫のストレス		.064	.070	.377 ***	.126

注. 数値：相関係数, \*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

**Table 15** 仕事時間、残業時間とストレスの相関係数：妻パートタイム137人とその夫

	夫の ストレス	妻の1日の 仕事時間	夫の1日の 仕事時間	妻の 残業時間	夫の 残業時間
妻(パートタイム)の ストレス	.056	-.028	-.146	-.006	.009
夫のストレス		-.004	.160 †	-.138	.141

注. 数値：相関係数, † $p < .1$

児を持つ夫婦を対象とした本研究では、妻フルタイムの夫婦は「共振型」と言えるだろう。乳幼児を育てながらフルタイムで働く妻の多忙さは、夫を巻き込まずにはいられないことが推察される。あるいは、妻フルタイムの夫婦では、子どもが成長するにつれて、「共振型」から「個別化型」へ移行することも考えられる。

妻パートタイムの夫婦では、上述のように妻の仕事へのコミットメントが夫の心理的健康に影響を与えてはいない。しかしながら、以前に報告したように、乳幼児を育てる家庭では、パートタイムの妻を持つ父親と比較して、妻がフルタイムの場合には「身体的な世話」「遊び」が多かった（佐藤，2012）ことを考え合わせると、パートタイムの母親の育児の生活面と心理面の両方における孤軍奮闘が推測される。

さて、上述の仕事のネガティブ・スピルオーバーの3項目の合計点（0～3点）の平均値について、父親と有職母親の間で $t$ 検定を行った（有効回答数237組）。その結果、仕事役割を家庭役割に持ち込むネガティブ・スピルオーバーは父親のほうが0.1%水準で有意に高いことが明らかになった（Table 16）。

**Table 16** 仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバー：母親が有職の夫婦（対応のある $t$ 検定）

母親	父親	$t$ 値	sig.
0.79 (.78)	1.27 (.83)	-6.46	***

注. 数値：平均値(SD), \*\*\* $p < .001$

さらに、母親の就業形態別にみると、母親についてはフルタイムとパートタイムの母親で有意差がみられないのに対し、父親についてみると、妻

がフルタイムとパートタイムの場合で有意差がみられ、妻がパートタイムのほうが仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーが5%水準で有意に高い（Table 17 参照）。Table 12 に示したように、パートタイムの妻を持つ夫のストレスはフルタイムの妻を持つ夫のストレスより高い。上述のようにパートタイムの仕事を持つ夫のストレスは妻の仕事時間と連動はせず、夫自身の仕事時間とのストレスの間には有意傾向がみられる。したがって、妻がパートタイムで働く夫は職業役割上のストレスが高く、それを家庭に持ち込んでいると言えるだろう。妻がパートタイムで働きながら乳幼児を育てる夫婦の心理的葛藤は大きいことが推測される。

そして、父親については仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーとストレスの間に相関（5%水準）がみられるが、母親ではそのような傾向がみられないのが特徴的である（Table 18）。これは先行研究の福丸（2000）の研究結果と一致する。

**Table 18** フルタイム母親とその夫の仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーとストレスの相関

	ネガティブ・スピルオーバー フルタイム母親 ( $n=109$ )	父親 ( $n=346$ )
ストレス	.151 <i>n.s.</i>	.109 *

注. 数値：相関係数 \* $p < .05$

乳幼児を持つ母親は仕事と家庭の多重役割を担うため、総労働時間は父親より母親のほうが長いことが確認されている（田中，2000）。本データでも、家庭外労働と家庭内労働を合わせた総労働時間は父親の15時間16分と比べて、母親のほうが

**Table 17** 仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバー：母親の就業形態別 $t$ 検定

母親				父親			
フルタイム ( $n=109$ )	パートタイム ( $n=125$ )	$t$ 値	sig.	妻がフルタイム ( $n=115$ )	妻がパートタイム ( $n=130$ )	$t$ 値	sig.
0.77 (.80)	0.78 (.76)	-0.13	<i>n.s.</i>	1.10 (.81)	1.36 (.82)	-2.56	*

注. 数値：平均値(SD), \* $p < .05$



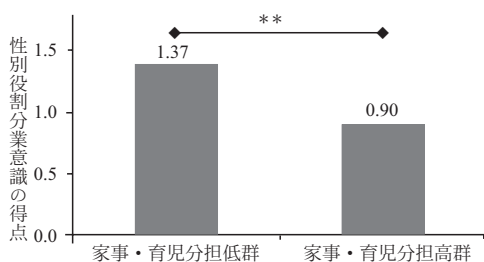
16時間 5 分と長い<sup>注3</sup>。

上述のTable 11 に示したように、ストレス度は有職母親のほうが父親より有意に高いのであるが、母親においては、仕事を家庭に持ち込むこととストレスの間に相関がないのはなぜだろうか。

これは家事時間・育児時間が夫との間で不均衡であっても、仕事を家庭に持ち込むことをせずに、自分の仕事の継続と夫との育児の協同を成立させている母親のミクロのジェンダー・ポリティックスではないだろうか。そして、男女の性別役割分業が根強い日本の社会の「母親は本来家庭にいて子育てに専念するもの」というマクロのジェンダー・ポリティックスが夫婦の心理状態に影響を及ぼしているといえるだろう。

#### (5) 夫婦の性別役割分業意識と育児の協同

父親の性別役割分業意識と家事・育児分担のかわりを見る。家事時間・育児時間の長さによってそれぞれ 3 群化し、クロス表<sup>注4</sup>を使って、「家事・育児分担低群」「家事育児分担高群」を抽出した。「家事・育児分担低群」「家事育児分担高群」の 2 群の性別役割分業意識を比較したものを Figure 1 に示した。「家事・育児分担低群」は性別役割分業意識の得点が、「家事育児分担高群」より有意に低い（1%水準）。すなわち、父親の性別役割分業の意識と家事・育児分担の行動は一致している。夫婦の育児の協同を阻む要因のひとつは父親の性別役割分業意識であることが確認された。



注. 性別役割分業を理想とする方が得点が高い。  
数値：平均値，\*\* $p < .01$

**Figure 1** 家事・育児時間の 2 群と父親の性別役割分業観

冒頭で述べたように、船橋（2006）は家事・育

児分担をめぐるカップルの交渉には、顕在化した対立だけでなく、潜在的な葛藤や、葛藤すら生じさせない政治性が働くとし、ミクロなポリティックスと定義している。父親の育児参与は父親の労働時間の長さ、夫婦間コミュニケーションの影響を受けている。そして日本の社会に根強い性別役割分業のマクロレベルのジェンダー・ポリティックスは、家庭内のミクロレベルのジェンダーポリティックスに投影され、母親の過重な育児・家事の分担へとつながっている。

本調査の結果からは、夫の片働きから平等主義タイプの夫婦の共働きへと移行する過渡期にある日本の夫婦の育児の協同は、ミクロのジェンダーポリティックス、言い換えると、母親の意識的、無意識的な忍耐の上に成立していることが示唆された。

#### 文献

- 裴智恵. (2007). 共働きで夫はストレスがたまるのか. 永井暁子・松田茂樹. (編). *対等な夫婦は幸せか*. (pp.63-76). 東京：勁草書房.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋. (1992). ローゼンバーグの自尊心尺度. 星野命 (訳). *セルフ・エスティームの心理学*. (p.264). 京都：ナカニシヤ出版.
- 深谷昌志. (2008). *育児不安の国際比較*. 東京：学文社.
- 福丸由佳. (2000). 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連. *家族心理学研究*, 14(2), 151-162.
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎. (1999). 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連. *発達心理学研究*, 10(3), 189-198.
- 船橋恵子. (2006). *育児のジェンダー・ポリティックス*. 東京：勁草書房.
- 平山順子・柏木恵子. (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？. *発達心理学研究*, 12(3), 216-227.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子. (2006a). 多重役割に従事する子育て期夫婦の関係満足度と心理的健康 - 妻の就業形態による比較 -. *聖徳大学研究紀要 人文学部*, 17, 33-40.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子. (2006b). 職業生活が

中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討. 発達心理学研究, 17(1), 62-72.

牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵. 編著. (2010). 国際比較に見る世界の家族と子育て. 京都：ミネルヴァ書房.

水落正明. (2007). 夫婦で仕事と家事の交換は可能か. 永井暁子・松田茂樹. (編). 対等な夫婦は幸せか. (pp.47- 61). 東京：勁草書房.

佐藤淑子. (2009). 日本の子どもと自尊心. 東京：中公新書.

佐藤淑子. (2011). ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ夫婦の育児の協同 - 日本の中の多様性一. 鎌倉女子大学紀要, 18, 15-26.

佐藤淑子. (2012) 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動. 鎌倉女子大学紀要, 19, 25-35.

石曉玲・桂田恵美子. (2010). 保育園児を持つ母親のディストレス：相互協調性・相互独立性及びソーシャルサポートとの関連. 発達心理学研究, 21(2), 138-146.

石曉玲・桂田恵美子. (2006). 夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討 - 乳幼児を持つ母親を対象とした実証的研究 -. 母性衛生, 47(1), 222-229.

渡邊香・篠原ひとみ. (2010). 産褥一ヶ月児の母親の育児不安とSelf-Esteemとの関連. 秋田大学医学部保健学科紀要, 18(2), 1-9.

渡邊恵子. (1998). 女性・男性の発達. 柏木恵子. (編). 結婚・家族の心理学. (pp.233-292). 京都：ミネルヴァ書房.

注1) 1日の仕事時間＝(週当たりの労働時間÷5日)＋(月の残業時間÷20)＋(片道通勤時間×2)。これまでの分析(佐藤, 2011)では通勤時間を片道で計算していたが、往復に修正した。父親の1日の仕事時間が10時間以下の短群111名と14時間以上19時間以下長群88名で育児感情を比較。父親の1日の仕事時間が20時間から26時間という極端な仕事時間を記入した回答者は除外した。

注2) 母親の職業の内訳はフルタイム122人、自営15人、パート137人有職母親計274人、専業主婦92人、

全体の有効回答366人。

注3) Table 3はペアデータであるが、ここでは有職母親を回答を得られたすべての父親と比較した。

フルタイムの母親	人数	平均値	(SD)	最小限	最大値
育児時間	122	4.36	(1.32)	0.50	9.00
家事時間	121	2.79	(1.41)	0.10	7.00
仕事時間	119	8.97	(1.74)	2.24	14.50
総労働時間	118	16.09	(2.47)	7.44	22.40
全父親	人数	平均値	(SD)	最小限	最大値
育児時間	345	2.12	(1.34)	0.10	8.00
家事時間	298	0.74	(0.59)	0.03	3.50
仕事時間	338	12.30	(2.70)	5.94	19.50
総労働時間	277	15.27	(2.67)	9.00	22.34

母親の総労働時間16.09は16時間5分に換算。父親の総労働時間15.27は15時間16分に換算した。

注4) 育児時間と家事時間のクロス表

	家事時間	30分未満	30分～45分	1時間以上	合計
育児時間					
1時間以下		36	40	17	93
1時間半～2時間半		20	39	33	92
3時間以上		19	29	61	109
合計		75	108	111	294

## 要旨

本研究は、育児期家族において、社会・人口動態的な変数が、父親と母親の自己認識や性別役割分業意識、夫婦間コミュニケーション、心理的ストレスにどのような影響を与え、それが育児の協同にどうかかわっているかを検討した。対象者は乳幼児を育てる366組の夫婦である。主な結果は、(1) 父親の労働時間が長い場合、子どもの身体的な世話の頻度が少ない。(2) 夫婦間コミュニケーションがよいと、父親は子どものしつけ、遊びの行動を多くする。(3) 父母の自尊心は育児への肯定感と相関があるが、母親の就業形態による自尊心に顕著な違いはみられない。(4) 心理的ストレスは有職母親の方が父親より高いが、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーは父親の方が高く、家庭内のミクロのジェンダー・ポリティックスの可能性が示唆された。

(2012年9月28日受稿)